

『千と千尋の神隠し』の世界観を中心とした作品の受容の仕方の違い —外国人と日本人へのインタビュー調査に基づく比較—

大河内 真理子

近年、「クールジャパン」の世界的な流行が顕著である。クールジャパンとは、日本のサブカルチャーを中心に日本文化が国際的に評価されている現象、またはそれらのコンテンツそのものを指す用語である。世界的に有名なジブリ作品の中でも最も興行成績が高い『千と千尋の神隠し』がそのようなクールジャパン流行の先駆けではないかと考え、これを題材に外国人・日本人それぞれがどのように作品を受容するかを明らかにしたいと考えた。

クールジャパンや日本のアニメーションの海外における評価に関する先行研究としては、取屋（2006）や呉・野地（2012）の論文があげられる。これら二つの論文は国民性や歴史的背景を理由とする受容の違いには言及しているが、個々人のライフストーリーや考え方にはふれていない。

そこで本研究では『千と千尋の神隠し』について、個々人に焦点をあて、外国人と日本人それぞれがどのように作品を受容するのか、個々人の違いが生まれる要因は何かを明らかにする。作品の受容の仕方には①異文化への興味や異なる世界観に対する柔軟性の度合い及び②育ってきた環境などによるライフストーリーが影響しているという仮説をたてる。

調査対象は主に 20 代から 30 代の外国人及び日本人とし、半構造化インタビューを行った。調査対象者に対し、理解しやすかった、あるいは理解しにくかった場面やキャラクターを中心に尋ね、『千と千尋の神隠し』をどのように受容しているかを明らかにする。

外国人 6 名、日本人 3 名の計 9 名に調査した結果、調査対象となった外国人 6 名のうちほとんどが、自分にとって異質な世界観そのものを魅力として作品を受容していた。また一部の外国人は、『ふしぎの国のアリス』や『オズの魔法使い』といった自文化圏の児童文学や、自分にとってなじみのある童話・伝承などの世界観と比較し作品を受容する傾向がみられた。一方、日本人は世界観に対しては疑問や抵抗を抱くことが少ないためストーリーに注目したり、キャラクターに自己投影したりしながら作品への理解を深める傾向があった。さらに外国人の中でも、日本人のようにストーリーやキャラクターに注目して作品を語る人々には、家族も日本文化を好むなどの背景がみられ、日本文化あるいは異なる文化に対する強い関心や柔軟性を持つ傾向があり、ライフストーリーとの関連性がみられた。

このように『千と千尋の神隠し』は、それを鑑賞する者の文化とは異質な世界観があるがために多くの外国人から受容されている。しかし外国人の中には自文化圏の作品にひきつけた解釈をした人や、自らのライフストーリーに基づいてストーリーやキャラクターの解釈をした人もおり、異質なために受容する以外の受け入れられ方もあることがわかった。今後のクールジャパンの戦略ではそれらを意識していく必要がある。

（指導教員 後藤嘉宏）